Steel Landscape 鉄の点景

日本の甲冑は時代とともに独自の発達をとげ、移りかわっていったが、その最大の焦点となったのは、やはり戦国時代だと考えられるだろう。この時代にはいわゆる集団戦での機能性を重視した当世具足(とうせいぐそく)といわれるものが発達し、南蛮とよばれた西欧文化の流入もあって、甲冑もその影響を受けた。戦国の世が終わると甲冑は実用ではなく、むしろ格式のための装飾品となってゆく。その意味でも戦国時代がひとつの節目になってくるだろう。今回は戦国の当世具足をひとつのきっかけとして、鉄の衣装・甲冑に目を向けてみる。

黒漆五枚胴具足（重要文化財）。

戦いの衣装としての鉄——

甲冑（かっちゅう）

時代の躍動を感じさせる当世具足

写真の甲冑は戦国時代を駆け抜け、奥羽の覇者として名を馳せた伊達政宗の愛用と伝えられるものである。4カ所の蝶つがいでつながれた5枚胴のもので、大量の鉄板が使用されている。鉄板の表面は黒漆で仕上げられ、全体として堅牢なつくりである。政宗の霊廟である瑞鳳殿を発掘調査した際、腐食は進んでいるものの、ほぼ同型の具足（ぐそく）が見つかっており、政宗がこの形式をとくに好んで愛用したことが改めて確認されている。実戦主義を旨とした政宗の姿勢がうかがえる甲冑である。

この形式の5枚胴は関東や東北で多く用いられ、関東具足とか仙台胴具足と呼ばれた。戦国時代に普及したいわゆる「当世具足（とうせいぐそく）」には肩を防御する袖の部分が小型簡略化されたものが多いが、政宗の具足ではとくにその傾向が強く、代わりに小鰭（ひれ）といわれる鉄板の張り出しで肩を守るようにつくられている。

甲冑は時代にともなってさまざまな変遷をみせるが、戦国時代の当世具足、とりわけこの伊達政宗愛用の甲冑などが「鉄を着る」というイメージにもっとも近いものといえるのではないだろうか。甲冑が「ハレ」の装いであることを思えば、戦国時代の装いの中心となった素材は、「鉄」だったことになる。

全体としてストイックとも思えるほど機能的につくられている政宗の甲冑だが、額に取り付けられた三日月を思わせる前立てが派手派手しく目をひく。実はこうしたデフォルメも当世具足の特徴のひとつといえる。戦国時代には、それ以前の馬上での一騎打ちという戦いの形式から歩兵が大きな比率を占める集団戦への移行が一段と進んだ。当世具足の特徴は、こうした集団戦で効を奏するために、動きやすさと防御効率を高めた点にあるが、同時に集団の戦いでは、将となる存在のシンボル性をひき立たせる必要性も出てきた。一軍の将たる者であれば明らかに際立った存在感を誇示している必要があり、そこに当時の伝統打破的な風潮が重なって、大胆ともいうべき数々の意匠が生まれた。徳川四天王といわれた本多忠勝は、仰々しいまでの鹿角を兜にかざしたし、井伊直政は金属板のアンテナのような角を取り付けた。そのほかにも一の谷の険し

い崖をモチーフにしたものや、さまざまな獣など、前衛的といえる意匠も多い。武将は戦場では自己の存在をいかにアピールするかを重視したため、軍の長以外の者でも、突飛な甲冑を着用することがあった。奇をてらったものでは人体を型どった肌色の胴に毛髪様に毛皮をあしらった同じく肌色の兜と面を組み合わせ、半裸に見せようとするものなども流行している。

機能、装飾性、格式……

武士が台頭してきた平安後期頃から、源平の合戦の頃にかけて確立されていった鎧兜、いわゆる大鎧（おおよろい）といわれるものは、接近した間合いの騎上から矢を放つ「射撃戦」を前提としたものだった。「やあやあ我こそは……」という名乗りから始まり、矢を射ちつくした後は、刀を交え、最後には馬から引きずりおろして格闘の末にとどめを刺す。そうした戦いでは、全身を防御する大鎧が効果的だったようだ。

しかし徒歩での集団戦が一般化し、鉄砲も登場してくるようになると、動きにくい大鎧に代わって、より機能性を追求した当世具足が登場してくる。当世とは「今風の」という意味だが、これがいわば当時の「ニューウェーブ」だったのだ。それまで鎧の多くは武士の晴れ着だったこともあり、赤、浅葱（あさぎ）色、紺など、鮮やかな糸や革で鉄板をつなぎ合わせていた。鎧の場合こうしたつなぎを「威（おどし）」とよぶが、大鎧などそれまでの伝統的なものでは鉄板に多数の穴をあけてつなぐ、いわゆる毛引威（けびきおどし）といわれる方法が採用されていた。われわれが源平合戦の武者を思い浮かべる時の、鮮やかに刺繍どりされたような鎧の外見は、装飾性の高い毛引威による効果なのである。それに比して当世具足では、穴の少ない素懸威（すがけおどし）が多く採用されており、強度の点でも、また水ぬれの後の乾燥の速さなどの点でも利があった。5枚の鉄板で胴をつくった「最上胴（もがみ）」のほかに、前後2枚に分けた「仏胴（ほとけ）」（つくりが仏像の胴体のようであるところから）や、胴丸と呼ばれる剣道の防具に見られるような形式のものが当世具足では多く用いられたようである。

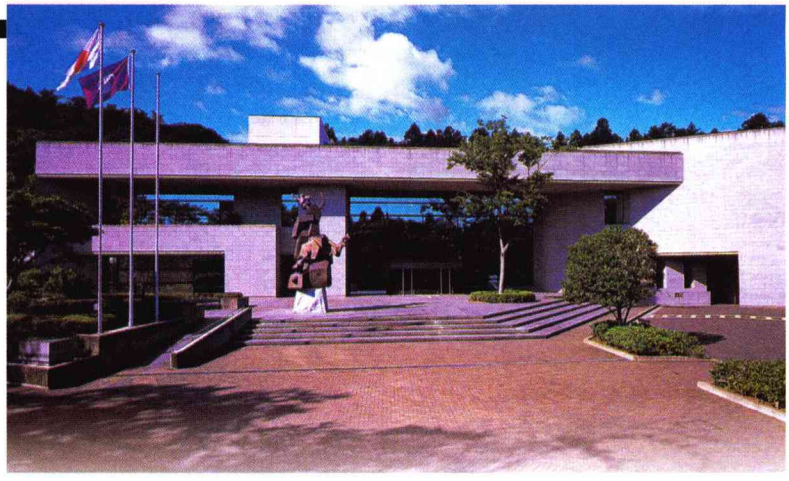
伊達政宗画像。

その後、江戸の太平の頃には、甲冑はむしろ工芸品として装飾性をエスカレートさせていく。実用から離れたこともあり、当世具足で見られたような進取の傾向はなくなり、むしろ格式を重んじるために古式趣味になっていく傾向があったようだ。それが幕末の頃になり再び騒乱の気配が世を覆うようになると、武士たちはもういちど戦闘の装いとしての鎧を求め始める。しかしすでに火力の力が圧倒的になってきており、甲冑では防御しきれない時代となっていた。それでも武士としての装いを、ということから、鉄ではなく、革を漆などで固めた軽量で動きやすいものがこの頃かなり出回った。今日風にいうならスポーティタイプとでもいうべきだろうか。時代の流れというのは時に複雑な文化を残すものであることを実感させられる。

［写真提供：仙台市博物館］

仙台市博物館

関ヶ原の合戦の年に築城が始まった仙台城三の丸跡に建てられた仙台市博物館では、仙台藩にかかわる歴史・文化・美術工芸資料を多数収蔵している。写真の黒漆五枚胴具足のほか、伊達家歴代藩主所用の武具なども多数展示されている。

休館は月曜日、祝日・振替え休日の翌日、12月28～1月4日

問合せ先：仙台市博物館 情報資料センター
TEL 022-225-3074
仙台駅より市営バス「宮教台」「青葉台」行き、博物館・国際センター前下車
車の場合は仙台宮城インターより約10分